

---

# 絶望殻

朝花 飴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶望殻

### 【Nコード】

N2470B

### 【作者名】

朝花 飴

### 【あらすじ】

どこにでもある日常の中で絶望を纏う少年は1人の男と出会う事で少しずつ成長していく

# 1

それは

春の終わりだった

芽吹く花に

眼を向けぬまま

僕の春は

終わっていた

世界にはどれだけ

不幸な人間が

いるのだろう

薄暗い路地裏で

勝手に特等席にした

ビールケースに座り

ボンヤリと

そんな事を

考えていた

ある事が切っ掛けで

学校に

行かなくなった僕は

煌びやかな摩天楼の  
中を徘徊する  
蟻の様だった

何をする訳でも無く

同じ人の流れに

溺れて遊び

気付けば

公園のベンチで

眠っている

きつと

蟻の方がもつと

有意義だろうな

自分自身を

皮肉りながら

その無意味さに

苦笑いをした

そして

もうこの絶望から

逃れる術など

無いのかもしれない

不意に答えは

僕の中にやってきて

そんな  
単調な答えにすら  
僕は抗う事が  
出来ずにいた

世界には  
どれだけ不幸な  
人間がいるのだろう

何の慰めにも  
ならない  
まるで多数決の様な  
曖昧さにまで  
僕は  
縋ろうとしていた

夜が更け  
深夜は  
気温の変化と  
反比例する様に  
街の熱気は  
上昇していく

暴れる様な喧騒も  
踏み込んで  
いけない裏の部分も  
今の僕には  
心地良かった

すべてが継ぎ接ぎで

すべてが傷だらけで

ある意味都合の良い  
一体感の様な  
まやかしに浸る事が

今の僕にとっての  
すべてだった

しかし

そんな刹那的な  
快楽の中で  
僕は1人の男と  
出会う事になる

不躰な程凶々しく  
最も苦手とする  
タイプの人間に…



## 2

それは

唐突な出会いだった

もしかすると

出会いなんてものは

そんな堅苦しいものではなく

無造作にそこに転がっていて

気付くか気付かないかでしかないような気がする

手を伸ばせば

簡単に掴めるのに

それをしない行為は

まだ自分自身が

強い存在だからと

思い違いをしているからだろう

そして

それは

自分が自分に迷い

墜ちているからこそ

気付かされる

ないものねだりのようなものだと思う

暗闇の路地裏

いつもの僕の



特等席に

見知らぬ男が座り

煙草を吹かしていた

そいつは

当たり前のように

僕に笑いかけ

手招きをした

例え

それがどんなに

不気味で恐ろしい結末だとしても

その時の僕には

抵抗する意思はなかった

独りの時ほど

他人を欲する

例えそれが

殺人鬼でも

僕はついていってしまうだろう

それくらい

僕の

危機感は薄れていた

近くまで行くと

その男の輪郭がはっきりとしてきた

細身だが

がっしりとしていて

髪は黒く綺麗に整えてあり

この場には相応しくない清潔感があった

煙草を持つ手が

とても

美しい気がした

その男も

僕の姿を見ていた

僕は自分の服の

汚なさに少し

恥ずかしくなった

いつもは別に

気にしない事なのに

あれ…いつ

着替えたんだったけ？

僕は自分の

昨日までをすっかり忘れてしまっていた

それほど意味のない時間だったのだろう

僕はまた自虐的な笑いを浮かべて

男の向い側に座った

僕達を挟んで

間に1人通れるくらいの狭さだ

こんなところ  
通る奴もいないほど  
この街の裏側は  
静かだった

「煙草：ちようだいよ」

僕はその後に  
殺されてしまう  
可能性なんて  
一切無視して  
そんな  
行動に出ていた

別に僕が死んでも  
悲しむ人もいないし  
楽になれるなら  
それでいい：とさえ  
思っていた

男は胸ポケットから  
煙草を取り出し  
僕に渡す瞬間に  
ピタリと動きを止めた  
そして僕を見ながら

「お前：未成年だろ？」  
と笑いながら言った

「：違うよ」僕は嘘をついたが

男は真に受けたのか

どうでもいいのか

僕に

煙草を投げ渡した

火の灯るライターに

煙草がジジジ：と

心地良い音で

焼かれる

「お前：ここに来て

何日目だ？」

男は自分の煙草を靴の底で消しながら  
話かけてきた

僕は煙草の煙で輪っかを作りながら  
鼻で笑った

「何：あんた警察？」

もしそうなら面倒臭いと思ったが

男は違うと答えた

「：なら黙秘権を行使します」

「はっ：最近のガキは面倒くせえな」

男は

笑い飛ばしながら

僕を

見据えながら言った

「俺は

ここら界限の地主だ  
正確にはその息子だ  
けどな

親父はもう歳で  
長くねーから

今は俺が任されてる  
それでだ

最近ここに若いガキが1人でウロウロしてるっていう話を聞いた  
最近のガキは物事を知らないくせに  
やることは見境ないからな  
今から放火でもすんのか？」

男は僕に渡したライターを指さしながら  
真顔で言った

その言葉に苛つき

「テメーのだろっ」

ライターを男に

向かって投げつけた

男は簡単にそのライターを手に取り

静かに重みを

増した声で話始めた

「まあ：それでな」男が煙を吐き出しながら豹変するように  
僕を睨みつけた

その目つきは鋭く

さっきまでの笑顔は

嘘のようだった

そして

ゆっくりと近づき

僕の肩を掴んだ

「こちら辺でウロウロされんのも困んだよ  
放火やら売人やら

そんなもんは知ったことじゃねえ

ただ面倒事が嫌いなだけだ…解るな？」

男の手に少し

力が入る

冷たい表情は

そのままだ

僕は

その迫力に押され

震える声で

「…うん」

とだけ答えた

別に僕は何もしてないのに悪人に仕立てあげられてしまった  
しかし

そんな理不尽にも

応じるしかないような恐怖感があつた

男は手を放し

解ればいいんだよ

と呟き

また僕の特等席に

座り直した

「おい…」

その呼びかけに

僕は少し震えながら

その顔を見た

すると

「…とまあ…地主の

言い分としてはここまでなんだが俺個人としてお前に興味がある

こんな所で

何してんだ？」

さっきまでの顔は

どこに

いったのだろう

僕は戸惑いながら

その顔を見つめることしか出来なかった

「ん？」

怖かったのか？」

男はまたさっきまでの笑顔を浮かべて

煙草の煙を

吐き出しながら

言った

「俺から言わせると

お前のほうが

怖いぜ？」

毎日ここにきては

何もしないで

座ってる

傍から見れば

いつ爆発するか解らん時限爆弾みたいな感じだぞ」

またそこで男は笑う

僕にはこの男の

どこまでが本当なのか解らなかった

この笑顔の裏側には

あの冷酷な顔が

あるのだと思うと

僕はその人への言葉にさえも

恐怖を抱いてしまった

それはあまりにも

僕の身勝手と偏見だということに

その時は

気づいてはいなかった

そんなことを横目に

男はズカズカと音を立てながら僕の心に入ってくる

「学校のことか？」

それでも親か？」

この男には遠慮という言葉はないのか

それともわざとなのか

そのことに

一々反応するように

僕の心は

敏感に痛んだ

当たっているからだ

僕は混乱した

何故こんな目にあっているのか

見ず知らずの人間に

心を傷つけられる筋合いはどこにもないはずだ

なんで僕だけこんなことに巻き込まれるんだろう

そんな風に考えると

何故か

涙が出てきた



理不尽な壁みたいなのが周りを囲い

僕の声は届かない

だけど周りの声は

僕には届き

そして

壁に反射しながら

いつまでも心を抉る

黒い塊が

僕に囁く

お前は

生まれてくるべきじゃなかった

お前の居場所なんて

どこにもないんだ

死ぬことも出来ない

お前に生きる力もないんだ

黒い影は

何人も何人も溢れ

その言葉は壁に反射して僕に突き刺さる

僕はたまらず

頭を抱え

そこに

蹲ってしまった

その僕の姿を見た  
男は静かに  
僕の肩に触れた

さっきとは違い  
とても

優しい気がした

僕は顔をあげた  
顔は涙でグシャグシャだった  
男の顔が

ぼやけて見えた

なんか笑っているようで腹が立った

「なんだよ：何笑ってんだよ

なんで僕だけこんな目にあうんだよ」

涙と鳴咽で声にならない声で僕は泣き崩れた  
誰から見ても

格好悪くて

それさえもが

自己嫌悪だった

でもその男は静かに  
でも

優しい声で

「それはお前が  
生きてるからだ」

それは馬鹿にしたような言葉だった

生きているから

苦しんで

傷つけられて

そして死んでいく

その道に

一体どんな意味があるのかが解らない

もしかしたら

意味などないのではないか

そんな

気持ちにさえなる

僕は男の顔を

睨みつけた

「もし生きる意味が

あるのなら

こんなに不幸に

なんかならないし

こんなに

傷つかないでいいはずだ」

僕は声を荒げて

吐き出した

答えのない質問に

誰もが嫌な顔をする

決まった流れだ

しかし

男は顔色変えずに

優しい声のまま

「俺には

お前の不幸や

傷の深さが解らない

だけど

不幸を幸せにすることや傷を治すことは

絶対に出来る」

男は僕をずっと見つめたままだ

優しい顔をしていた

今まで何回も聞いた

その答えに

何故かその時は

信じてしまえる

そんな力があつた

それはきつと

この男が同じような

境遇に立っていたからであろう

### 3

男は静かな声で  
淡々と話を始めた

男の眼は  
少しだけ悲しそうな  
そんな気がしたが  
それに気付くと  
男は  
不器用に微笑んだ

煙草の煙が  
二人分  
宙に舞った  
それだけが

僕達を見ていた  
唯一の傍観者だった

「数年前の話だ：  
さっきも言ったが  
俺の親父は

こころ辺の地主で  
金は持っていた  
ただ：

それだけの男だ  
何人目かも解らない  
女が俺の母親だった  
それが

本当かどうか

その時の俺には  
解らなかったけどな  
別に

気にもしなかったが  
ただ  
寂しかった

親父は仕事と女で  
忙しく

俺の面倒など  
見てくれた日は  
一日もなかった：

母親だった女だけが  
俺の味方だったよ

傍から見れば

俺は  
何不自由なく

育てられた子供だ

よく苛められたよ

簡単なことだ

自分よりも

優れた環境や

自分よりも

弱い人間は

暴力や数によって

蔑まれる

すべては

無いものねだりさ

いじめた奴等は

俺の住む環境を

羨んだ

俺は

奴等が

当たり前の様に

感じる

親の愛情や優しさが

欲しかった

なあ？

いじめって

なんでもなくならない  
と思う？」

唐突に質問を  
投げ掛けてきた

男は

煙草を消して

そこに転がった  
空き缶に落とした  
：ここらも

また掃除

しなくちゃな：

男は独言を

言いながら

僕の答えを待った

「それは：

僕は返答に困った

考えたことが

無い訳じゃない

しかし

答えの見つからない

問題は解くことが

出来ないから：

僕は

考えない様に

していた

これは



成るべくして  
成るんだ…と

男は僕の顔を見て  
ニツと笑って聞いた

「答えが無いのか？」

「…うん」

僕は思ってる

答えを頷いた

「多分な

それが正解だよ」

えっ？

僕は聞き返した

だとしたら

いじめは

なくならないし

やっぱり

辛い思いや

不幸せな人間は

そのままなのか？

まあ…そう焦るなよ

男は僕を諭しながら

煙草に火を点けた

「仮にどっちであれ

先に正解が無いと

思った方が

いじめる

いじめられる

その

権利みたいなものを

手にしてしまうんだ

お互いが

気付かない内にな

俺達の心には

隙間がある

きつと

寂しさや

不安みたいな

感情なんだろうなあ

それを優位に

立つことによって

埋めようとする

そのためには

味方と敵が

必要になるんだ

そして優劣を

決めようとする

誰だって

いじめたい

訳じゃないし

いじめられたい

訳じゃないさ

ただ

心の隙間を

埋める過程で

生じるもの：

なんじゃねえかな

どっちが悪いって

話じゃないんだぜ？

俺達の心の中には

上に立ちたい奴や

そうでもない奴

平和主義者もいれば

戦争主義者もいる

そいつの生い立ちや

環境で随分と

変わってしまうんだ

仕方ないって言えば

それまでだ」

「じゃあ：

どうしたら

いいんだよ」

僕はたまらず聞いた

「所詮

いじめる側の

言い訳だよ

そんなの

いじめられる側は

いつだって

何も言えないんだ」

「なんで？」

男の

その言葉に

僕は

止まってしまった

「なんでって

正解がないんじゃない

どうしようも

ないだろ？」

「確かに正解はない

だったら作ればいい

自分自身の正解を」

男は僕の顔を

見据えて言った

「正解を…」

「そうだ

出来るだけ

平和な正解をな」

それを聞いて  
僕は笑った

「そんなの  
綺麗事だよ」

僕は目の前を男を  
馬鹿にした  
こいつも同じだ  
優位に立つ事で  
満足を得るために  
他人を  
傷つける奴なんだ  
やっぱり  
この世は  
弱い者のためには  
回ってないんだっ

僕はまた  
泣きそうになった

すると男は言った  
「そうだ」

：と  
その眼も  
悲しそうだった

「確かに綺麗事だ  
でもそうじゃなきゃ  
ずっと

そのままなんだよ  
何かを変えるなんて  
綺麗事だよ  
だからやるんだよ  
自分自身に  
負けないために」

見てみろよ…

男は僕達が  
座っているこの道を  
指さした

街灯も少ない  
この裏通りは暗く  
とても

冷たい雰囲気だ

「この道はこれでも  
まだ人通りが  
多いほうだ

だから

ゴミが溜まる  
だが

そのままにしてちゃ  
俺の気分がワリイ

毎週掃除する訳だが  
誰が捨てたかも  
解らんゴミを

なんで俺が…って  
思うが

ここらを

任されてるから

仕方ないっちゃ

仕方ない」

「それといじめと

何の関係があんのさ」僕はさっきから

苛立ったまま

口調を荒げて聞いた

「まあまあ

そんな

突っかかんなよ

あのな

集団心理ってやつだ

ここにひとつゴミが

捨ててあれば

それを見た奴は

やっぱりここに

ゴミを捨てるんだ

いじめも

はつきりとは

言い切れんが

同じことだろ

いじめる奴

いつめられる奴  
それにつられて  
いじめる奴  
いじめられるのを  
ほっとく奴  
その全部が  
集団心理によって  
成り立ってしまう

でも

弱い心の隙間を  
埋めようとする奴の  
気持ちも  
解らない訳ではない

まあ

肯定はしないけどな

誰かがやるから  
俺もやるっていう  
気持ちがあるなら  
いじめは  
なくならない：

俺はそう思う」

そしてまた  
煙草に火をつけた  
この  
ヘビースモーカーは



やっぱり

悲しそうな眼をして

煙を宙へ

吹き飛ばした

「だったら

どうすればいい？」

静まり返った夜に  
僕の心が反響した

「学校で

いじめられて

家じゃ親に

煩く言われて

自分の居場所なんか  
どこにも無いんだ

集団心理か

なんだか

解んないけど

いじめが

なくならないなら

僕はどうしたら

いいんだよ！？

僕が死んだって

誰も

悲しまないんだ！」

僕の心が  
汚れた言葉が  
夜に響いた

そしてまた  
凜とした静寂が  
訪れた

男の指先から  
灰がポトリと落ちた

そして

男は口を開いた

「俺は…  
お前が死んだら  
悲しいし  
悔しいと思う」

男は顔を上げず

静かな声で言った



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2470b/>

---

絶望殻

2011年1月26日09時27分発行